

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

イタリア食文化紀行

～シエナ編～

岡本 勇志

ナポリからなんとか到着したシエナは、街が綺麗。クリーム色の石作りの街並み。小さな広場やさらに駐車場までもが絵になっている。



【シエナの市庁舎】

シエナはトスカーナ州にあり、フィレンツェに並ぶ大きな都市である。

街は丘の上であり、街中に入るには門をくぐる。全ての街が丘の上にあるウンブリア州で一年間暮らした私にとっては、慣れ親しんだ雰囲気を感じた。

さて、私にとってもっとも大切なことは食事だ。シエナで有名なものは、なんと言ってもキアニ

ーナ牛とキャンティ・ワイン。どちらもシエナとフィレンツェの間にあるキャンティ地区で生産される、世界的に有名な食材である。

そしてパスタはトスカーナ特産のピーチという水と粉だけで作るものがある。

これらの食材を求めて、シエナの街に入った。

到着したのはお昼過ぎで、考えてみれば朝からギューギューのバスに揺られて何も食べていない。そう気づいた時から、急にお腹が空いてきた。

とはいうもののレストランを探そうにも、すでにランチの時間は終わっている。せっかくシエナにきたというのにバールのパニーノで済ますのも味気ない。

さてどうしたものかと迷いながら、まずは中心地から少し離れたホテルへ向かうことにした。

バス停と正反対の場所にあるホテルに行くにはシエナの中心街を抜けなければならない。フラフラと歩いていると小さな路地があり、その向こう側は人が大勢いる。何気なくその路地を抜けてみると素晴らしい広場についた。そう、そこがシエナの有名な広場であるカンポ広場だった。イタリアでもあまり見かけない扇型の広場である。中心に向かって下り坂になっていて、中心には綺麗な建築物が立っている。小さな子供やお年寄りカップルでたいへん賑わっていた。この見事な広場に圧倒されつつ、広場を抜けホテルへ向かう。

『それにしてもお腹が空いた。このまま何も食べへんのはしんどいな』

そう思いながら歩いていると、目の前に私を待っていたかのように一軒の pizzeria が現れた。これこそ旅の出逢いである。きっと空腹でない状態でこの pizzeria の前を通っていても何も気にせず素通りしていただろう。空腹だからこそ出逢えたのだ。迷わず入ると一人の青年が pizza を作っていた。

『いらっしやい！何にする？』

『うーん、朝から何も食べていないから、まずは美味しい pizza とビールが欲しい』

『朝から何も？それはお腹が空いているだろう！でも、君はラッキーだね。今ちょうど焼きたての僕イチ推しのものがあるよ！』

『いいね！それにしよう！』

彼はそう言うと、オープンから何やら pizza より分厚いものを取り出し私にくれた。

『これは？』

『これは、トマトソースとモッツアレツァを pizza の生地二枚で挟んで焼いたもの。ナポリで学んだんだ。僕のおすすめさ！』

『おー！！うまそう！実は昨日までナポリにいて、今シエナに着いたところだよ！』

『本当に！？偶然だね！ナポリはどうだった？』

偶然にも話がはずみ、気がつけばすっかり彼と話しこんでいた。さらにそこに、この店の常連だという男性が入ってきた。

『よう！！今日もうまい pizza を頼むぜ！』

『やあ！アントニオ！調子はどう？それより今日本人と話していたところさ！昨日までナポリにいたんだって！』

『こんにちは！名前はユウシといいます！』

『おー、日本人か！よろしく！俺はアントニオ、生まれはナポリで、今はここシエナでシェフをやっているんだ！ナポリは気に入ったか？』

『もちろん！食べ物も、街も、全てが最高だったよ！』

『だろ？？ナポリは世界で一番さ！』

なんとも偶然が偶然を呼び、ナポリ人のシェフと知り合いになることができた。旅の中で一番嬉しい瞬間である。行けば必ず見ることのできる観光名所や金を出せば食べられる料理より、思いがけない人との出逢い。これが旅の醍醐味。

お互い料理関係ということもあって、話は盛り上がった。そろそろホテルの時間だと、お別れのあいさつをし、ホテルに急ぐ。

ホテルはシエナの中心から徒歩 20 分程のところ。少し距離があったが、初めての街を歩くのはたとえ何もない道でも楽しいものだ。

予約していた時間に到着した。小さなアパートのような建物、小さな看板を見つけインターホンを押す。反応がない。もう一度。やはり反応がない。

ドアを押してみる。鍵がかかっている。

『あれ？時間、間違えたかな？』

確認するが、時間どおりだ。

少し焦ったが、まあ、そのうち誰か来るだろうとホテルの前で待つことに。ナポリでの様々な経験から、あまりハブニングに動じなくなっていた。

それにしても誰もこない。さすがに一度ホテルに電話しようと電話をするが、応答がない。これは困った。さて、どうしようかと考えていると、

『Ciao! sei Yushi?? giapponese? sto qui!!!』

どこからか私の名前を呼ぶ声が。でも、どこかわからない。

『Ciao!! Qui! ! Sopra!!!!』

『ん？上？？』

ふと上を見ると、ホテルのベランダから一人の女性が手を振っている。

『Buonasera!! Ciao! sì, sì, sono Yushi!』

『Eccomi qua! Dai, vieni, ti aspettavo. Scusami, facevo le pulizie quindi non potevo sentire』

掃除をしていたから、チャイムの音が聞こえなかったと。なんともイタリアらしい。

兎にも角にもホテルに入ることができて一安心した。ホテルの中はとても綺麗で、部屋もオシャレだった。この女性は管理人でルーマニア人だった。日本が大好きということで話が合い、さらに私が働いていたレストランのシェフの奥さんがルーマニア人だったことで私がルーマニア語を少し知っていたこともあり、話が盛り上がった。

管理人さんから「夕食は中心地に行くの？」と尋ねられたので、1 時間ほどしたら行くつもりと答えたら、私も 1 時間後に掃除が終わるので、車で送ってあげるとのこと。部屋に入り 1 時間ほど休

んでから、管理人さんの車でシエナの中心街へ向い、夕食のレストランを探した。

さて、レストラン情報を調べると、老舗のシエナ料理専門店があるとのこと。今宵はそこに決め、歩いていると、道中で何やらいい雰囲気のパールを発見。ワインを立ち飲みできそうで、それを見て生粋の酒飲みである私が寄らないはずがない。吸い込まれるように店に入り、prosecco（ガス入りのワイン）を飲み、軽く aperitivo をした。

パールでは常連たちが集まって、政治やスポーツの話で賑わっている。どこの街も日常は同じ。この雰囲気がたまたまなく好きである。お酒と雰囲気に酔いしれ、お目当てのレストランへ。

レストランは大きく、店内には昔のシエナの写真など飾ってあり、いかにも老舗な感じ。

注文したのは、ズッキーニの花とリコッタチーズの前菜、ラグーソースのタリアテッレ、キアニーナ牛のフィレ・ステーキ、スタッフおすすめのキャンティのフルボトル。



【キアニーナ牛】

どれも美味しかったが、驚いたのはキアニーナ牛である。これまで日本の和牛が一番と思っていたが、それが一挙に覆された。

確かに日本の和牛と比べて歯ごたえはあるが、ふんわりと柔らかく、それでいて噛むと肉の味がしっかりしている。塩加減、焼き加減も最高。さらに肉をほおばり、ワインを飲むと肉の味とワインの香りが一体となり、最後に上質な甘さが口に残る。うまいっ！この一言だった。

勢いよく肉を食べ、フルボトルを飲み干した。その様子を見ていたホールスタッフが『Sei bravissimo!! siamo contenti!』と大変喜んでくれた。

うまい肉を食べ、うまい赤ワインを飲み、ほろ酔い気分で夜のシエナに出た。カンポ広場へ向かう。また昼とは違う美しさ。ところどころライトアップされ、なんとも言えない美しさ。思い切って寝転がり夜空を見上げると、なんと満月。カンポ広場と満月。

人が造り出したものと自然が生み出した美しさが見事に一体化していた。

『綺麗なな』、思わず口に出る。

ワインのせいかな、少し居眠りしてしまった。カッコつけた言い方をすれば、カンポ広場に包まれた最高の居眠り。ふと目を覚ますとやっぱり満月だった。

さて、明日はどのような出逢いがあるのかな。まずはドウオーモに行こうか。そんなことを考えながら、ホテルへと戻った。

(当館元留学生)

～レストランご紹介～

京都下鴨 ダイニングぼてちん

今月のコレンテにご寄稿頂いた岡本さんがおつとめの、京都下鴨にある洋食店です。引き続き今月も特典ご提供頂きましたので、ぜひご利用下さい。名物のタンシチューがおすすめです。

住所：京都市左京区下鴨西本町 21-1-101

アクセス：京都市バス・京都バス「府立大学前」

下車 目の前

Tel: 075-781-0028

HP: <https://www.botechin.com>

特典：ぼてちんのチラシか今月号のコレンテを提示していただくとアイスクリーム1つサービス
(特典期間：2020年4月末まで)

『レオパルディとキリスト教』

國司 航佑

レオパルディはキリスト教をどう考えていたのだろうか。

母アデライデは極めて信心深い人物であり、父モナルドも、フランス軍にイタリア半島が侵略されたときさえ教皇庁に忠誠を誓う程の反動主義者であった。このような両親のもとで育ったジャコモは、カトリック的な価値観に対して息苦しさを感じていたらしい。彼は、ヨーロッパがキリスト教化される前の、古代世界を愛した。レオパルディの作品のうちキリスト教に関連する要素を見出すのは難しい。『いいなずけ』において神の摂理に導かれる物語を描いた同時代のマンゾーニと比較すると、実に対照的である。

だが、レオパルディは無神論者ではない。信仰を明らかに否定しているような言説は見られないし、ニーチェのようにイエス＝キリストを敵視している様子もない。レオパルディのキリスト教観には、いかんせん一筋縄ではいかないところがある。

先程筆者は、レオパルディの作品のうちキリスト教に関連する要素を見出すのは難しいと述べた。だが実は、明らかに『旧約聖書』を下敷きにした作品が一つある。詩集『カンティ』所収の「始祖たちへの頌歌——あるいは人類の起源について *Inno ai patriarchi, O de' principi del genere umano*」がそれである。

ところで(いきなり脱線するが)、レオパルディの詩は初期の作品の方が複雑な印象を受ける。とりわけ、1824年に上梓された初の本格的詩集『カンツォーネ集』は、どの詩を見ても相当難解である。この難解さは意図的なものであり、レオパルディ本人がこの詩集に関して「注意深く読まなければ、理解できない」と述べているほどだ。そして「始祖たちへの頌歌」は、まさにこの『カンツォーネ集』において初めて発表されたものである(その後『カンティ』に再録される)。『カンツォーネ集』

には、本連載で以前紹介した「イタリアについて」(本誌 323号 2017年 10月発行参照)や「アンジェロ・マーイヘ」(本誌 341号 2019年 4月発行参照)なども収録されている。これらも相当手強かったが、「始祖たちへの頌歌」はそれに輪をかけて難解である。イタリア文学の研究者アレッサンドロ・マルティーニは、「始祖たちへの頌歌」こそ「言語の面からいって最も難解な作品」だと言う。筆者が簡単に理解できないのも、無理のない話である(と言い訳させてもらいます…)

それでは、「始祖たちへの頌歌」とはいかなる作品なのだろうか。まず、「始祖たち patriarchi」という表現は『旧約聖書』の「創世記」を想起させるものだが、このことは改めて説明するまでもないだろう。ただし、通常始祖と言えばユダヤ民族の最初の王、とりわけアブラハム、イサク、ヤコブの三者を指すことが多い。だが「始祖たちへの頌歌」では少し事情が異なる。冒頭をまず見てみよう。

人類の高名なる父祖たちよ、
苦悩に満ちた子供たちは
あなた達を称えて歌うだろう——星々を永遠に
動かし続ける主は、
私たちに比べてあなたたちをはるかに深く愛していた。
生命に満ちた光の中に生まれたあなたたちは、
涙を流すこともはるかに少なかった。

これは、「始祖たちへの頌歌」の最初の6行の拙訳である(行数は原文と合わせたが、語順は大幅に変更しなければならなかった)。レオパルディを含む「私たち」とは現代人のことであり、その言葉が向けられている「あなたたち」こそ「人類の父祖」である。詩人は、「私たち」と「あなたたち」を対比しつつ、前者が人生に苛まれる定めにあるのに対して、後者は神に祝福される存在であったという。

第2聯において、「創世記」の登場人物への具体的な言及が始まる。「私」はまず、「初めて日の光を見た」人間アダムに語りかける。エデンの園がいかに幸せな場所であったか、そしてその子孫

(現代人)がいかにも不幸な運命を背負わされているかが、滔々と語られているのだ。同じ聯には、「弟殺し」カインも登場する。レオパルディはカインを「文明化した屋根を初めて立ち上げた」(＝都市文明を築いた)人物として描いている。文明こそが人類に「隷属状態」もたらした、というのである。人類の不幸の起源を「文明」に見るこうしたレオパルディの志向は、一般に「歴史的ペシミズム」として知られている。この点に関しては、後程詳述しよう。



【ウィリアム・ダイス作「ヤコブとラケルの出会い」】

出典元:<https://it.wikipedia.org/wiki/Rachele>

第3聯では人類(の一部)を「うめき声を上げる津波」から救ったノアが登場する。しかし、救われた人類は再び墮落し邪な生活を始めてしまうという。続く第4聯では、「ユダヤ民族の父」アブラハムがまず登場し、神との対話に触れられ、その逸話から、当時、人間はまだ世界に愛されていたことが暗示される。同じ聯の後半では、「リベカの息

子」(アブラハムの孫)ヤコブが登場し、彼のラケルに対する愛が次のように詠われる。

抑制の効かない愛が、
[ヤコブの]勇敢な心を、
長い年月の追放と苦痛、そして奴隷状態の疎ましい労働に、
進んで向かわせたのである。

「創世記」に語られるところによれば、ヤコブは、愛した女性ラケルと結婚するために計14年もの間、奴隷のような労働を強いられた。レオパルディは、この逸話から着想を得たようである。

ところで、ヤコブの「愛」を語るこの詩句は解釈が難しい。筆者が参照した注釈によれば、レオパルディはここで、純粋な愛を見失ってしまった現代人と対比しつつ、ヤコブの無垢な愛を称賛しているという。だが筆者には、「愛」が引き起こしたという「長い年月の追放と苦痛」、「奴隷状態の労働」などの明らかに否定的な表現が気にかかった。これは、カインのくだりにある、「文明」が引き起こした問題を表す単語とかなり類似したものである。ひょっとすると、レオパルディは「文明」と同様に「愛」にも人類を墮落させる原因を見ているのではないだろうか。

ここで「歴史的ペシミズム」という用語を説明しなければならないだろう。この連載をお読みの読者諸氏は既にお気づきのことだろうが、レオパルディの世界観は極めて悲観的なものである。だが実は、それにも段階があった。人間が不幸な運命にあるとしても、それは現代人にのみ当てはまる事象である——レオパルディはキャリアの前半においてこう考えていた。「自然」に従い、あるがままに生きていた古代は幸福の時代であったが、人類は「理性」を獲得し「文明」を構築するにつれて徐々に不幸になってきた、というのである。そして、現代人の不幸のメカニズムを歴史的に解釈するため、この時期のレオパルディの思想は「歴史的ペシミズム」と呼ばれた。

ところがその後、レオパルディは「歴史的ペシミズム」を捨て、「普遍的ペシミズム」に至る。すなわち、現代にあっても古代にあっても、人間は変わらず不幸な運命に定められており、「自然／本

性 natura」は幸福をもたらすものではなく、むしろ悪の根源だと考えるようになるのである。抒情詩「シルヴィアへ」の「ああ自然よ、ああ自然よ／なぜおまえはいま／あの時約束したことを果たさないのか」というよく知られた詩行も、「自然」が人類の敵であることを糾弾する、「普遍的ペシミズム」の表現である。本連載で以前紹介した「みずから」における「そして世界は泥土だ」という詩句も、彼の「普遍的ペシミズム」を簡潔に表したものと言えるだろう。

ところで、レオパルディがキャリアの最後に自ら編集した詩集『カンティ』は、全般的に執筆時代順に配置されている。だから、最初から読んでいくとレオパルディの思想の発展をそこに読み取ることができる作りになっている。その中で、一般に「普遍的ペシミズム」の最初の詩とみなされているのは、第9の詩「サッフォーの最後の歌」である。なぜならそこでは、現代人ではなく古代の詩人サッフォーのうちに、人類があらがうことのできない不幸な運命が描かれているからだ。ここに来て、「幸福な古代」に対立する「不幸な現代」という図式は成り立たなくなるのである。

「サッフォーの最後の歌」に対して、幸福な古代と不幸な現代のコントラストをテーマにした「始祖たちへの頌歌」は、まさに「歴史的ペシミズム」を体現する作品ということができるはずである。そして現に、「始祖たちへの頌歌」は第8の位置に置かれている。単純に考えれば、第8までが「歴史的ペシミズム」の時期に属し、第9以降の詩が「普遍的ペシミズム」に属する作品だと言えそうである。ところが、である。執筆年代から言えば、「サッフォーの最後の歌」は、実は「始祖たちへの頌歌」の前に書かれている。レオパルディが、『カンティ』を編集する際にこの両作品の順序を入れ替えていたのだ。

ここで仮に、「サッフォーの最後の歌」と共に「始祖たちへの頌歌」を「歴史的ペシミズム」から「普遍的ペシミズム」への移行期の作品と捉えるとしよう。すると、先ほど問題にした「ヤコブの愛」もまた、文明化される前の幸福な時代の証ではなく、人間の本性に秘められた不幸への傾斜と見ることもあるいは可能ではないか。さらに言えば、最初人間アダムもまた、文明を知る前の幸福な

時代を象徴する存在と単純に考えることはできない。というのも、彼こそが「知恵の実」を齧って楽園を追放された張本人だからである。「始祖たちへの頌歌」のうちには、やはり「歴史的ペシミズム」を逸脱するニュアンスが含まれているように思われる。

レオパルディはキリスト教をどう考えていたのか、という問題に立ち戻ろう。仮に彼がカトリック教会に対して反発に近い感情を抱いていたとしても、(少なくとも「始祖たちへの頌歌」を執筆したこの時期までは)その根底にキリスト教的価値観が強く染みついていたということができよう。この点では、彼のありようは同時代の啓蒙思想家のそれに近いものがある。例えばルソーは、『人間不平等起源論』において人類の起源を歴史的に論じているが、そこには「創世記」の影響が見て取れる。カントの『人類の歴史の臆測的起源』にいたっては、完全に聖書の記述に依拠した論述になっている。

1824年、「始祖たちへの頌歌」が出版される前に、レオパルディは「人類の歴史」という散文を著していた。「始祖たちへの頌歌」のモチーフを踏襲する作品だが、そこには『旧約聖書』の登場人物は現れない。そして、その「人類の歴史」を巻頭に据えた散文集『オペレッテ・モラーリ』は1827年に出版される。レオパルディの「普遍的ペシミズム」の完成形は、そこにありありと見て取ることができるのである。

<参考文献>

- Giacomo Leopardi, *Canti*, Roma, Carocci, 2014.
Alessandro Martini, *Inno ai Patriarchi, o de' principii del genere umano*, in AAVV, *Lettura dei Canti di Giacomo Leopardi*, Novara, Interlinea, 2013, pp. 91-113.
ジャコモ・レオパルディ, (脇功訳), 『カンティ』, 名古屋大学出版会, 2006.

(京都外国語大学講師)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>